

## JA実践事例紹介

# 「ここで暮らしたい」を叶える 協同の力 (前編)

## —JAひだ管内「SUN・SUNハウス」における 地域づくりの実践—

藤崎綾香

一般社団法人日本協同組合連携機構 基礎研究部 研究員

第30回JA全国大会決議における「暮らし・地域活性化戦略」の対応方法の一つとして、「活動・事業を通じた組合員の豊かな暮らしの実現（協同活動と総合事業の好循環）」が掲げられている。しかし、少子高齢化や若者層の流出が進む過疎地域においては、やむなく支所や生活購買店舗を撤退し、事業面で組合員のニーズに応えることが難しくなっているJAも多いのではないだろうか。

その一方で、生活インフラ機能の維持が困難な地域においても「ここで暮らしていきたい」と願う住民は存在する。そしてそのような人たちが集まり、「自分たちで地域の困りごとを解決していこう」とする地域づくりの取り組みも各地で行われている。

事業の継続が困難な状況においても、組合員・地域住民の「ここで暮らしていきたい」という願いに対して、JAはどのように応えることができるだろうか。この課題を考える上で、今回はJAとの関わりの中で地域づくりを実現している2つの事例を紹介する。前編では、JAひだ管内で2024年からスタートしたSUN・SUNハウスでの活動を紹介します。



老若男女が集った、SUN・SUNハウスの夏休みイベント「ペットボトルの風鈴づくり」。

## ■ 1. JAひだ管内における旧Aコープ店舗活用の動き

JAひだは1996年に飛騨地域の6JAが合併して誕生した。2001年にはさらに4JAが合併し、現在は下呂市、高山市、飛騨市、白川村を管内としている。2024年3月31日時点での正組合員数は13,376人、准組合員数は21,228人である。同年度の農畜産物販売高は過去最高額の228億円となっている。

その一方で、生活店舗購買事業はJAひだ設立以来、過疎化や競合店の進出などの影響で恒常的に赤字となっていた。そのため2001年時点では管内に44店あったAコープは減少を続け、2018年2月には第2次総合整備計画に基づき8店(高山市内：Aコープ国府、宮、朝日、飛騨市内：古川、杉崎、信包、河合、宮川)、2023年3月に3店(高山市内：荘川、清見、高根)を閉店。2025年2月に残る11店のうち10店を閉店(うち4店は地元小売業者などが事業承継)した。これにより、同JAではAコープ白川を除いて実店舗における食料品・生活用品の供給を終了することとなった。

そうした中、組合員・地域住民の要望を契機として、旧Aコープの施設を地域の人々の交流の場として活用する取り組みが育まれつつある。このような旧Aコープを活用した地域づくりの取り組みは2025年8月現在、JAひだ管内で5か所実施されている(旧Aコープ宮の「わいわいルーム」、旧Aコープ信包の「JAサロン・のぶかるちゃー」、旧Aコープ河合の「ばあちゃん食堂」、旧Aコープ朝日の「SUN・SUNハウス」、旧Aコープ荘川の「つながるんるん広場」)。

今回取り上げるのは、旧Aコープ朝日の施設を活用して行われているSUN・SUNハウスの活動である。



SUN・SUNハウス

## ■ 2. 組合員の声から始まった地域住民の拠点づくり

### —SUN・SUNハウス、SUN・SUN会設立の経緯—

SUN・SUNハウスがある岐阜県高山市朝日町(旧朝日村、2005年に高山市に編入)は、2025年4月1日現在で人口1,353人、高齢化率は45.8%となっている。高山市内にある9つの支所の所管区域の中でも3番目に人口が少なく、過疎化が深刻な地域であるといえる。

こうした状況の中、Aコープ朝日が2018年2月をもって閉店してしまった。しかし、コロナ禍前の2019年秋頃、JAひだ助けあい組織「山びこの会」朝日支部の林歌子さんと小林洋子さんが、山びこの会の事務局を務める生活指導員(当時経営企画部ふれあい課、現協同活動推進課所属)の向畑真由美さんに「旧Aコープを拠点に山びこの会の活動をしたい」と相談をした。このことが契機となり、ふれあい課を事務局として山びこの会や地域住民、朝日まちづくり協議会や高山市社会福祉協議会朝日支部、高山市役所朝日支所などの地域の関係団体と共に旧Aコープの利用方針を話し合うための「地域連携会議」が立ち上がる。2019年度～2022年度はふれあい課長として、2023年度以降は朝日支店長としてSUN・SUNハウスの設立と運営をサポートしてきた廣田令寿さんによれば、Aコープ跡地はJAのものではあるが、組合員や地域住民のものでもあること、そしてこの施設を拠点として活動するのも組合員・地域住民自身であることから、彼らに声かけをしながら地域連携会議を進めてきたという。その結果、地域の複数の関係団体に所属している住民が多いことから人づてに話が広まり、様々な団体関係者、地域住民が集まって地域連携会議での話し合いが重ねられた。

そして2023年に高山市議会議員の石原正裕さんが地域連携会議の座長となったことで、地域課題の洗い出しやどのような活動拠点にするのかについての方針づくりが一気に進み、2024年4月17日にSUN・SUNハウスがオープンした。オープン当初の行事は山びこの会によるミニデイサービス「あったかルー



JAひだ助けあい組織「山びこの会」メンバーとSUN・SUNハウス  
林さん(左から3人目)、小林さん(右から3人目)、向畑さん(右端)、川邊夫婦(左端)

ム」や、朝日町に住む川邊雅彦さん夫妻の「おひさまパン」によるパンの製造・販売のみであったが、SUN・SUNハウスに人が集まっていくにつれて、地域住民や団体から「自分たちもここで活動したい」という要望が多く集まるようになった。そのためSUN・SUNハウスの活動をコントロールするための組織が必要となり、2024年7月に「SUN・SUN会」が後発的に設立された。

SUN・SUN会の会則によれば、同会は「朝日・高根町(朝日町に隣接。現在朝日町と高根町が朝日町に位置する朝日小学校の学校区となっている)における地域課題解決に向けたくらしの活動」に取り組み、「SUN・SUNハウスを活動拠点として『協同の力』発揮による元気な地域づくりを目指」すことを目的としている。会員は「原則としてJAひだ朝日・高根支店管内に住所を有する住民及び組合員でこの会の目的に賛同する者」と定められている。前述した通り、管内の住民は地域の様々な関係団体に所属している場合が多いが、会員は団体ではなく個人としている。所属組織の制約を受けず、SUN・SUNハウスを「できることは小さいかもしれないが、自分たちがやりたいと思うことをやる」(廣田さん)場にすることを意図しているためである。

このようなSUN・SUNハウス、SUN・SUN会の活動の趣旨に賛同し、会員となっている住民は、2025年8月時点で66名となっている。そのうち役員は会長1名、副会長2名、会計1名、監事1名、理事6名、顧問1名(石原さん)であるが、役員と一般の会員に大きな役割の違いはないという。SUN・SUN会の役員会は奇数月の第4金曜日に行われており、今後のイベントの予定について話し合ったり、やりたいイベントの提案やそれに対する意見を話し合う。役員会だからと言って役員しか出席しないのではなく、一般の会員でも「地域のためにこういうことがやりたい」というアイデアがあれば、気軽に意見を出せる場だという。「役員だから出る」のではなく「やりたいことがあるから出る」という、会員の主体性・自発性を尊重する会の方針が、次に示すようなSUN・SUNハウスでの活動の広がりを生んでいると考えられる。

### ■ 3. 「暮らしの願いを叶える場所」として機能している SUN・SUNハウス

現在SUN・SUNハウスでは、山びこの会やJA女性部の定期的な活動をはじめ、朝日町・高根町の活性化を目的に朝日町在住の子育て世代6名で結成された「こどもミライ輝くあさひ・たかね」(以下「こどもミライ」)のメンバーを中心とした「ポケモンカードゲーム大会」などの子ども向けのイベント、向畑さんがSUN・SUN会の会員の中から生け花や陶芸、しめ縄づくりといった特技を持つ方を「地域先生」にスカウトし、それぞれの先生の得意分野を生かした「SUN・SUNカレッジ」など、幅広い活動が展開されている。

筆者が取材に伺った2025年8月6日～8月7日は、その週の平日5日間にわたって開催される夏休みイベントの期間の真っ最中であった。8月6日の日中はeスポーツ大会やペットボトルの風鈴づくりが行われ、多くの



地域団体の垣根も超え、数十名の大人が集まった「居酒屋縁」

子どもたちで賑わっていた。その一方、夜には石原さん発案の「居酒屋縁」が開催され、数十名の大人が集まり、山びこの会や高山市朝日支所長の下畑英史さん、地域おこし協力隊のフィリップさんらが腕によりをかけた手料理と共にお酒を楽しんでいた。

7日には、社会福祉協議会の野添みわこさんを講師に迎え、防災体験講座が開催された。主に朝日小学校の児童たちが参加し、全校生徒44名のうち約半数が、簡易トイレ・ダンボールベッドの作成、防災食の試食などを通じて、楽しみながら防災への理解を深めていた。また、同週の5日間は山びこの会を中心とした地域食堂が開かれ、1日50食の日替わりランチ(1食500円)が来場者に提供された。今回の夏休みイベントには、1日50名ほどが訪れる見込みであるという。

このように様々な活動が展開され、老若男女問わず住民が集う場として定着しつつあるSUN・SUNハウスであるが、そこでの活動の運営に関わる住民たちは、それぞれ異なる動機や背景を持っている。SUN・SUNハウス設立のきっかけを作った山びこの会の林歌子さんは、かつてAコープ朝日のパート職員で



「居酒屋縁」で振舞われた料理

あった。30～40年前はお正月やお盆、地域のお祭りの時期になると、多くの地域住民が家庭で作るご馳走の材料をAコープに買いに訪れ、大変賑やかであったという。そのような買い物客と会話をしながら働くのが「楽しくて仕方がなかった」と振り返る林さんは、Aコープの閉店に寂しさを感じ、山びこの会の活動をAコープを拠点に行えばまた地域の人が集まってくれるのではと考え、施設の利活用を提案した。

SUN・SUN会の会長を務めている森本守さんは、長年朝日町の歴史や文化に関心が

あり、SUN・SUNハウスを通してそれらを生かした地域づくりをしていきたいという思いから同会のメンバーになった。夏休みイベントでは飛騨川が太平洋に至るまでの流れを学びながら魚を捕る「魚釣り・魚つかみ教室」を企画している。同会を通じて、「自分の思っていたことを発揮できたことが人生の中で大きな喜びだった」と森本さんは語ってくれた。

副会長を務める池田紗代さんは前述の「こどもミライ」のメンバーでもある。池田さん夫妻は朝日町で生まれ育ったが、一緒に暮らしてきた知り合いが市街地に引っ越してしまうことで少子化が進み、地域内に親子で遊びに行けるような場所が無く、孤独感を覚えていた。どうにか地域を盛り上げたい、子育て世代の人たちにこの地域を知って楽しく安全に暮らして欲しいという思いから「こどもミライ」を立ち上げた。その同時期に自分たちの活動の趣旨と通じるSUN・SUNハウスができたため、一緒に活動することにしたという。「(こどもミライやSUN・SUNハウスでの活動を通じて)地域が活発になることで、ここに住み続ける人が増えて欲しい。子どもたちも将来この地域に残ることを選択肢の1つにして欲しい」(池田さん)との思いで、活動の運営に関わっている。

SUN・SUNハウスでの活動に参加する動機は、地域団体の関係者によっても多様である。例えば、「居酒屋縁」で料理を振舞っていた下畑さんは、以前高根支所に配属されていた際、地域イベントで住民が料理を提供する姿を見て、「自分もこういうことがしたい」と思い続けていた。2024年から朝日支所に配属になり、SUN・SUN会の役員会に参加した際に「居酒屋縁」の企画を知り、料理担当に立候補した。下畑さんは「住民に自分の顔と名前を覚えてもらいたい、この地域でどんなことをしているのか知りたいという思いもあり、SUN・SUNハウスでの活動にはなるべく顔を出しているという。

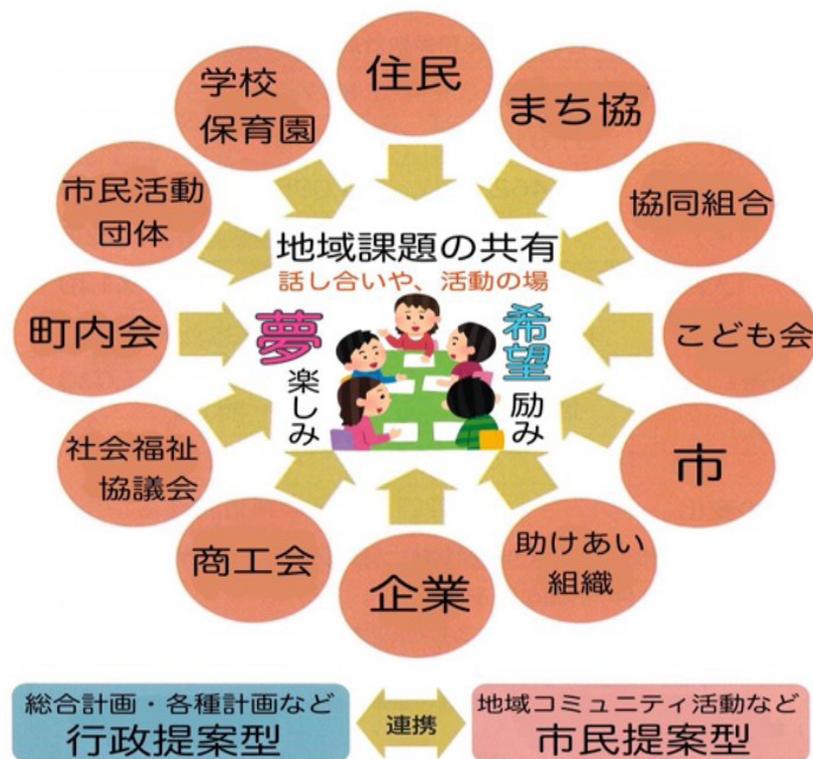


防災体験講座。写真中央、足元にあるダンボールベッドは高山市役所朝日支所から提供されたもの

一方、防災体験講座の講師を務めた野添さんは、所属団体で防災に関する情報提供をしてきた経験を活かし、今回の講座を担当することになった。SUN・SUNハウスに顔を出すことで「社協の知名度が低いため、住民に自分を知ってもらい、困ったら相談できる存在として認知してもらいたい」と考えている。また、「過疎化や高齢化が進む中、1団体だけで1つの事業を完結させるのは難しくなっている。様々な得意分野を持つ人たちと協力すればできることが増える。SUN・SUNハウスはまさにそのような場所だと思う」と語ってくれた。

以上のように、SUN・SUNハウスはこの地域で暮らし、これからも暮らしていくことを前提としている住民一人ひとりの中で育まれてきた願いが、地域課題解決の名のもとに実現する場である。それと同時に、地域団体と住民との信頼関係の構築や、団体間のハブ機能が発揮される場になりつつあるといえるだろう。

(後編へ続く)



地域連携のイメージ図(SUN・SUN会作成)